

# 羽黒の芭蕉考

——三日月日記を中心に——

佐藤 圓

## 内 容

- 一、修験道
- 二、呂丸
- 三、三日月日記
- 四、南谷

### 一、修験道

出羽三山は修験道の山である。山形県の最上川と赤川に挟まれた出羽丘陵の三峯で月山は、アスピーデ型火山、海拔一、九八〇米あり、湯殿山は一、五〇四米、羽黒山は三山を合祭する拝礼の山で、四一九米ある。

伝説では三十二代崇峻天皇の皇子、蜂子皇子の開山という。神仏習合の山である。

羽黒本地仏 観音 垂跡神 伊氏波命  
月山本地仏 弥陀 垂跡神 月読命

湯殿本地仏 大日 垂跡神 大山祇命

釈迦三尊では文珠普賢で、弥陀三尊では観音勢至であるが、ここでは大日如来である。これは湯殿の開山が、蜂子皇子とは別個に弘法大師だという伝説と、修験道そのものの性格に起因するのである。ともかく全盛を極めたのは鎌倉時代で、衆徒は七、八千と伝えられている。南北朝時代の正平年間には守永親王と北畠顕信の拠点であった。近世に入り、寛永年間に別当職を継いだ者に、傑僧天宥が現れ、山上二十八坊、山下三十六坊の盛大さを招来した。

芭蕉が来遊した元禄二年は、天宥から七代後で、五七代別当執行大円覚院大僧都法印公雄の時である。但し公雄は東叡山寛永寺の重職を兼ね、羽黒には和合院照寂別当代会覚阿闍梨（奥の細道記載）がいた。

別当は一山の統帥経営の責任者で、執行は宗教行事の最高位者である。公雄は兼職であったが、住坊も別当、執行の、二つに別れている。二の坂と三の坂の中間にある若王寺が別当寺で、南谷にある紫苑寺は執行寺であった。芭蕉はこの執行寺に宿泊したが、破格の

待遇もさることながら、実は羽黒修験道の掟のためである。

羽黒では信徒を霞と称している。奥、羽、佐、信、越の五カ国を霞場という。関八州は檀那場といい、信徒の宿泊もそれぞれ坊が指定されていて、任意のものは認められない。芭蕉庵所在の深川は、紫苑寺の檀那場になっていた。

修験道の掟と戒律は厳格で、この慣習は明治以後の神仏分離にもかわらず、いまだに厳守され、すべての行持作法も昔のままである。(観光用のPR山伏は別である)

修験道が教団の体形を確立したのは中世である。教義的には前代の鎌倉仏教を一つ飛び越えて天台、真言、法相など奈良平安仏教に直結していた。これが顕密二教による山伏行人として、呪術祈禱に終始した根本原因である。

一方山岳宗教として、神道信仰に直結した。本山派、当山派などの流派が生れたのはその後である。室町から江戸に入ると彦山派、羽黒派などが栄えた。

この他陰陽道や、道教の影響も無視出来ない。そのため「宗意安心」をあいまいにし「一宗の確立」を困難にした。唱え言も般若心経や陀羅尼と併せて、独特の呪文をまじえるようになったのである。しかし山岳のきびしさの中で鍛えた、靈験の体得者として最も宗教的であるといつてよい。

恐らく修験道の教理と、宗意安心を執拗に追究するのは徒勞であろう。それよりはむしろ、きびしい修行者として、或は超人的仙人能力の所有者として、ありのままの姿を民俗学的にとらえることが賢明である。

芭蕉文学を読む場合も(一)写実の紀行と(二)文芸的フィクションに併せて(三)背景としての宗教的意識を無視出来ない。

「靈山靈地の験郊、人たふとびかつ恐る。繁栄とこしへにめでたき御山といひつべし」(奥の細道)

## 二、呂丸

「六月三日、羽黒山に登る。関司左吉といふ者を尋ねて」とある、関司左吉の俳号を呂丸という。

「三日、吉、新庄ヲ立一り半(中略)羽黒申ノ刻近藤左吉ノ宅ニ着本坊手向ヨリ帰リテ会ス(中略)南谷へ同道」(随行日記)  
芭蕉は呂丸の案内で南谷の紫苑寺に赴いた。

「呂丸元禄四年俳諧修行の為松島より江戸に出て芭蕉庵を問ふ。翁が書ける三日月日記一卷を乞ふ。幸便に托して羽黒に送り、自身は京洛をさして上り、美濃谷汲の萃殿寺に会覚を問ふ。五年二月二日病死。一卷空しく筐となりたるも後年羽黒のながし竹江の有となり、其後宝永中鶴ヶ岡の藩士佐川勘蔵俳名李夕なる人の手に渡りたり。其の頃美濃の支考の肝煎にて此巻を主として一編を刊行し、三日月日記と云ふ。李夕没後市に売品に出たるを平田白之といえる人、百金を投じて購ひ平田家の家宝となる」(庄内に於ける芭蕉。写本。玄々堂芦汀)

文中美濃の会覚とあるのは、その頃羽黒を辞任した別当代会覚阿闍梨が、谷汲の萃巖寺にいたことを指すものである。しかしその頃会覚はまだ羽黒にいたし、呂丸の客死も五年二月二日ではなく、六年二月二日である。

「正善院の二日のところに、仁窓了義同年二月（元禄六年）染屋平兵衛先祖図司呂丸仏とあるのによってもあきらかであろう。過去帳に同年とあるのを元禄六年に註記したのは私であるが、それは呂丸の前に書かれたひとの下に元禄六年としてみるによつたものである。（中略）正善院は私の父が住職し、そのあとを私が継いだのだが今は弟が住職している」（羽黒の俳人図司呂丸。戸川安章氏）

又同氏は図司、近藤という二つの姓のうち何れか一つは恐らく母方のものであらうといっている。戸川説に従えば五年出郷、六年死亡ということになる。谷汲の萃巖寺塔頭地藏院転住は元禄六年八月で、呂丸没後六カ月過ぎである。会覚は宝永四年六月五日谷汲で亡くなり、羽黒の世代墓地にも墓碑がある。

「坂田（酒田）より羽黒へかゝる。塵（麓）の手向町旅人舎り所也。芭蕉門人図司呂丸とて俳士あり。四年以前洛の土に成ぬ。其所縁はと尋ね入るに亡跡は見事に相続し、賑敷渡世す。登山の日和親がてらに滞留。彼の門弟今は便りもなく、よりそうべきなかりし処に、かくと聞くより結かけて誹談みだれたる糸筋のもと末もわか

ず。いざさらば図司が懐旧をのべんと、坐して見るに庭のたゞずまひむかしになん替らずと云。松は五葉ことくしき捨石は草に埋れこころなき非情の有様洲瀬のさかひをしらざりき。

樹も石も有のまゝなる夏坐舖

桃隣

以下連句（中略）

右一卷となして靈前に供ふ。彼呂丸は一度風雅の眼を開き、四十に足らずして逝事本意なかるべし。師の信を感じ門人その道を捨てず已同志励むとぞ」（陸奥衛。桃隣）

桃隣が羽黒へ来たのは、元禄九年六月である。四年以前洛の土に成ぬとあるので、呂丸の没年は芦汀の元禄五年に一致する。しかし昔の人の、大ざっぱな流儀で、その年も加えた四年前とすれば戸川説と一致するわけである。

どちらにしても差は一年であるが、私が呂丸の没年にこだわるのは（一）三日月日記の受授と（二）時間と（三）場所を問題にしているからである。そのことは同時に不問にされている芭蕉の四閉関説を説明する手がかりにもなる。しかしこの問題は次の「三日月日記」のくだりで述べることにして、暫く呂丸の跡を追うことにしよう。

「玉月中比よりやみつき侍りて、何のすべきやうもあらで、春も二月の二日なるに身まかりける也。されば此郎には門にまたるべき子さへありて、妻はいと若くて侍り。

死に来てそのきさらぎの花の時」

（笈日記祭図司。支考）

二月二日だけはどの場合も間違いない。支考は元禄五年二月、松島から象瀉の旅へ出ている。支考のこと故、松島から出羽路へ急いで直行したとも思えないが、ともかく羽黒へ着いた時、呂丸はすでに死んでいたのである。門にまたるべき子さえありて、妻はいと若くて侍りには実感がこもっている。恐らく呂丸の死後、間もなくの文章と思われるが、この文で見ると元禄五年らしく思われて来る。

消安し都の土に春の雪 呂丸

これが呂丸の辞世である。辞世の句碑は手向町の稻荷神社境内に残されている。都の土にの「に」を「耳」と読むべきか「曾」と読むべきかは板刻の文字に疑問があるが、一応「に」と戸川氏の読み方に従った。

雁一羽いなでみやこの土の下

酒堂

大阪の酒堂も弔句をよせている。これで見ると呂丸が亡くなったのは美濃の谷汲ではなく、京都に違いない。酒堂は逸早く芭蕉に呂丸の死を伝え、芭蕉から鶴岡の公羽に呂丸の死を伝えていく。(鶴岡・児玉氏蔵)芭蕉には追いかけて去来からも知らせがあった。殊によると死の脈をとったのは医者としての、酒堂かも知れない。

当帰よりあはれは塚のすみれ草

芭蕉

当帰は山せりの一種で、乾帰とも書く野草である。まさに帰るべきの意を含めたものであるが、若い愛弟子への哀惜がにじみ出ている句である。殊に呂丸は修験者ではないが、空飛ぶ修験道を背景にした羽黒の住人である。すみれ草が痛々しい。

ふみきやす雪も名残や野辺の友

去来

野おくりや膝かくつきて朧月

史邦

去来と史邦は兄弟弟子として、呂丸の野辺送りにも立合ったらしい。

雲雀なく声のとゞかぬ名ごりかな 会覚

会覚はやはり谷汲ではなく、羽黒にいたのである。距離感に溢れた句で、京都と羽黒では、さこそと思われるものがある。それにしても呂丸は、三日月日記を師の芭蕉からいつどこで貰ったのだろう。

### 三、三日月日記

芭蕉が羽黒参拝の後、鶴岡で呂丸と別れ、酒田へ赴いたのは、元禄二年六月十三日である。芭蕉はそれから象瀉へ行き、象瀉から再び酒田へ戻り、海岸線を鼠ヶ関から越後路へ入って行った。そして九月の初め美濃から伊勢に辿りついて遷宮を拝している。

翌三年四月は石山の幻住庵にいた。八月には大津の義仲寺無名庵に移っている。四年四月には向井去来の落柿舎に入った。そこで嵯峨日記を書いている。そして同年秋江戸に移り、支考と桃隣が江戸まで随行した。支考は翌五年に、桃隣は九年に師の「奥の細道」を辿りながら羽黒で呂丸を弔った話は、前に述べた通りである。

一方、呂丸は元禄二年六月十三日、鶴岡で師翁に別れると、早速隨身中に指導を受けたメモの整理にとりかかっている。「聞書七日草」がそれである。

「呂丸はの中で芭蕉にあいた喜びを盲亀の浮木にあえるのに

たとえた。彼の質問は幼く、かつ何かしら伝授秘伝の存在を期待するような欠点をうかがわせるけれども、まことにこのましくも純真であった。もしこの気分がなければ聞書七日草について、これほどくり返して説きたてようとは私はせぬであろう。なかんづくその対話形式で進められてあるのが大きな異色といえよう。エッケルマンがおこなったゲーテとの対話のように、大部なものでこそないけれども、当時としては、たしかに出色のものであるにちがひなく魅力な一つをなしている」(山崎喜好氏)

私は修験道の伝授秘伝を知らない。しかしそのようなものであるという推定は、つかないわけではない。修験道の特色の一つは、伝授秘伝にあるといつてよい。従つてそういう雰囲気の中で、生活していた呂丸が、そんな気持で受取つたとしても避け難いことである。それだけに呂丸的な理解の仕方であると考えられる。

呂丸がいつ聞書七日草を完成したか分らないが、芭蕉が石山の幻住庵にいた元禄三年六月には、羽黒に路通を迎えている。路通は場合によっては、曾良に代つて奥の細道に随行したかも知れない人物である。当然ながら呂丸が修験的意識で直接耳にした師の言葉と、路通を通して耳にする師の言葉の間には、ズレと微妙なニュアンスの相違が想像される。又路通は支考ほどではないが、かなり個人的な人物でもある。

「林鐘の初め、月の山の御室をやどりとす。此所慈救の阿闍梨予が泉石のやまびを悲しむで憐れを加へたまふ事絶えず。又叟司呂丸

機をつくし心を隔てず横口する日あり」

(月山発句合)

林鐘は六月である。「六月律中ニ林鐘ニ注林衆鐘聚也」路通は有名な放浪者であった。

「この春も春めきぬれば霞の朦々たるは目をくつろげ、梅の芳ばしきは鼻を動かし、雲雀のちり／＼と囀るは我に流浪の思ひをすむ」

(返店の文。路通)

とにかく、じつとしておれない人物である。弟子達の中で、誰よりも早く奥の細道を追いかけて、羽黒で宗匠の扱いを救めたりした。呂丸とはいひ勝負であったかも知れない。前年元禄二年に於ける、路通の足どりを見ても、実に目まぐるしい。

先ず第一に細道の旅から戻つた師翁を、逸早く敦賀に迎えている。

目にしたつや海青々と北の秋

路通

芭蕉が伊勢の遷宮を拜して故郷の伊賀に帰ると、路通は師翁に別れて難波に赴いた。住吉神社に千句の奉納をして高野に上り、その足で今度は京に去来を尋ねて行った。元禄三年師翁が大津の無名庵にいと聞かや、再び湖南に廻つて同庵に転がりこんだりした。同庵では重ねて、奥羽の旅の土産話を聞いたものと思う。彼は矢も楯もたまらなくて、一人で師翁の旅路を追うことにした。

元禄三年路通がみちのくに赴くに

草枕まことの花見しても来よ

芭蕉

(茶の草子)

まことの花見とは、奥羽の旅のきびしさや、俗化をまぬかれた素朴の意も、こめられているものと思う。併せて風に吹かれる木の葉のように、単なる放浪に過ぎない、路通の性癖を誡めたのかも知れない。

路通は途中江戸に立寄った。それから岩城の平に、俳人の領主内藤露沾公を訪れた。

羽黒奉納

袖にふれて根矢に濁こぼ活摘山路哉

露沾

これは羽黒の芳賀兵左衛門氏に残されたもので、芭蕉が南谷に宿泊した時の接待役「芳賀」は、この人の父だと聞いている。三山雅集(呂笈篇。一七〇〇年木版本)では有縁の人々に、詩歌連俳を乞うたとあるが、羽黒に行くという路通との面接も、有縁の一つであったかも知れない。

内藤公を辞した路通は、足を伸ばして松島に赴いた。それから奥羽の山系を横断して、六月に羽黒へ辿り着いたのである。

「左右十八番名を月のやま発句といふ。此発起阿闍梨会覚、勸むる人釣雪法師、撰者呂丸判者路道が手に落ちたり。たとへあとさきのあやまりはおほく侍るとも四人の心とけて仏をうやまひ神をあふぎ、うれしさ悲しさの上をいひならべたるは、いかで円かなる道にもかなわざるべき。作者のかず廿七人、ともにながき世を契るものならん。」

冥加あらせたまへ古坊の柿の花

呂丸

おほ仏後に花のさかりかな

路通

(月山発句合)

まことの花見しても来よ、の錢別句を師翁から貰った路通が、「花のさかりかな」で応えたのかも知れない。「仏をうやまひ神をあふぎ」にも、神仏習合の修験道場として、羽黒山という修験的背景が鮮明である。

何れにせよ、呂丸にとって路通との邂逅は重大な転機であった。この地方には古くから団体で伊勢参りという習慣がある。しかしこれは精進潔斎した後で、部落代表の形の神詣であって、単なる意味の旅行ではない。当時の旅は「もし生きて帰らばと定めなき頼みの末をかけ」(奥の細道)とあるように、誇張なしの覚悟を必要としたものである。従って単独旅行は本人の決意だけでなしに、周囲の者も容易に承認しようとは、しなかつたであろう。

しかるに路通のやり方を見ると、いかにも気軽である。そこで呂丸も、それではという気持ちになったものと思う。その年を何年の何月頃にするかは、もう少し文献を漁る必要がある。

「葛の松原」という俳書がある。これは酒田で芭蕉を迎えた不玉、伊藤玄順の撰で、支考の考述である。発刊は元禄五年といわれている。支考が坂田(酒田)から羽黒に来た時、呂丸はすでに故人になっていた話は、前に述べた通りである。従ってこれを基礎にすると芦汀宗匠の「元禄四年俳諧修行のため松島より江戸に出て」と一致する。

ここで注意しなければならない点は、元禄四年出郷とは、文意に

はないが、春から夏にかけてという、暗黙の了解で成立しているということである。それは東北という風土的制限であって、格別な説明がなくとも、上方参りとはそのようなものという常識になっているからである。従って五年二月二日、洛で客死にも、時間的矛盾が起らない。しかしそれでは、三日月日記はまだ出来ていない。日記は五年八月八日のものだからである。従って三日月日記受授の場所を、常識的に江戸の芭蕉庵とするのも疑問である。

雑誌「文学」(二十一巻第六号)に斎藤香村氏は「師翁から三日月日記を得た呂丸が、同行の重行に托して郷里に送った」と書いてあるが、重行は同行者ではない。重行は呂丸が松島を経て、上方へ出発に当って

名月やふりよき馬を歩ませよ

重行

の饒別句を送っている。これには「呂丸を見送るとて」と断り書ま

でしてあるので、同行者でないことが明らかである。

それから呂丸自身の、松島での途中吟

呂丸

と一緒に、三日月日記の中に記録されている句である。従って呂丸は、出来上っていた三日月日記を貰ったのではなく、三日月日記は呂丸と会ってから書かれたものである。

三日月日記は、元禄五年八月八日であることは前に述べた。現に三日月日記の末尾には元禄八月八日とある。「五年」の二字か十二支の記載があれば迷わなかったであろうが、それがなかったばかりで、とんだ迷路を彷徨したことになる。

一書に五月五日とあるのは、どういう根拠に基づくのだろう。そ

れはともかくとして、八月八日であるから、呂丸の出郷五年でも遅くはない。そこで出郷五年、六年二月二日客死説も起るわけである。

しかし私は呂丸の出郷を四年と考えている。但し春ではなく、秋である。秋とする根拠は呂丸と重行の句によるもので、句意は何れも秋の名月である。今一つの理由は、残された郷土の遺家族と遺弟にとつて、何百里も遠い旅先での客死があまりいまいであったとしても呂丸を見送った年が、何年であるかを忘却するほどではないと推定するからである。そのため文献には出郷四年が、動かないものになっていると考えるのである。

又元禄三年路通と会った呂丸が、翌元禄四年秋までかかって、旅の準備と条件を揃えたと考えられるにも、時間的不自然さが無い。問題はそれから後の足どりである。

足の遅い元禄時代でも松島から江戸まで、そんなに多くの日数を必要とはしない。途中岩城の平で、内藤露沾公に会ったかどうか分らない。路通の紹介があったかも知れない。ともかくその年のうちに江戸へ辿り着いたとしても、芭蕉はまだ住居的に定着していない。

茂木茂氏が「東海道で芭蕉と行き違い」になったと説明しているが、三日月日記は旅先で書けるような内容ではない。幾ら記憶のよい芭蕉でも、あれだけ多数の門弟達がよんだ名月の句を、即座に書けるわけがない。それどころか芭蕉は神経質過る程、吟味し撰択している作家である。

「羽州岸本八郎右衛門二句炭俵に拙者句になり候公羽と翁の紛れにて可有候杉風より急度御断可給候」  
(書簡集)

八郎右衛門は八郎兵衛の誤りで、芭蕉の来遊を機に入門した、長山重行の給人である。ともかく芭蕉が江戸へ戻ったのは、前述の如く元禄四年十月である。橘町彦右衛門方に仮寓した。翌元禄五年五月に、杉風等の尽力で芭蕉庵を再建した。そして書いたのが「芭蕉を移す詞」である。この「芭蕉を移す詞」は三日月日記に併記された。従って呂丸は元禄四年の暮か、翌五年早々に、江戸で師翁と会っていることは確かである。但し三日月日記そのものは、以前として出ていない。

冒險的な推定になるが、江戸では何れ執筆の予定である、三日月日記の受授を約しただけで終ったのではないだろうか。本人はそのまま上方に上り、殊によると呂丸自身はそれを手にしないで終っているかも知れない。それだから呂丸が師翁から、三日月日記を貰ったというのは嘘だというのではない。芭蕉は相手が弟子とはいえず、約を違えるような人ではない。参観交替の庄内藩士(場合によって遅れて翌五年江戸へ出た重行)とか、幸便を求めて呂丸の郷里、羽黒へ送ったかも知れないのである。又羽黒の檀那場として、関八州には「つて」に不自由はしない。

どちらにせよ、呂丸の「上方に於ける旅」は元禄五年に違いない。呂丸と上方の印象は、元禄五年に結びついて強烈である。勢い五年客死説に落着きたくなるが、もう少し歩調をゆるめるとしよう。

まず第一に芦汀の「谷汲の萃蔵寺滞在説」である。これは会覚阿

闍梨の、萃蔵寺への転住が裏づけになっている推論である。しかし会覚の転住は六年八月であるから、呂丸が萃蔵寺を訪れたとしてもそんなに長い期間とは思えない。美濃と京洛には、蕉門の先輩が幾らでもいる。呂丸がその一人、一人を訪れたわけでないとしても、またたく間に歳月の経過は、考えられないことではない。

そしてその年の暮れ(元禄五年)あたりから、体の調子がおかしくなる。越えて六年の年を迎えると、「玉月中比よりやみつき侍りて」ということになる。ついに二月二日が命日、これが恐らく間違いない、呂丸の足どりであろう。六年二月二日説の戸川氏が「元禄六年に註記したのは私であるが」としたために、その点で疑問視されたりしているが、結果的には私も戸川説と同じように、元禄六年二月二日である。

気になるのは「芭蕉遺語」である。

一、三日月日記伊賀に有

これをどう理解したら、よいのだろう。私が伊賀の上野に、生前の菊山当年男翁を訪れた時、菊山翁は三日月日記は、兄半左衛門邸の裏に建てた無名庵で書いたといっていた。現物も伊賀に残っているという話であった。但し私は見せて貰ったわけではない。拒否されたのではなく、そこへ行くだけの時間がなかったためである。この話は菊山翁の「芭蕉雜纂」にも「芭蕉研究」にも出ている。しかし読んで見ると呂丸の三日月日記とは別種のもののようにである。おかしなことには、庄内にも三日月日記が二つある。

私にはよく分らないが、私は鶴岡の平田貢氏蔵をいつているだけである。そして同書はもう一つ、山形県に残されている「さみだれ」





芭蕉宿泊地・南谷紫苑寺跡

の歌仙と、

書体も気品もそっくりであったということだけである。

最後に

「呂丸は閉関中の師翁に会った、

唯一人の弟子」という

考え方についての間諷である。一体「閉関」

とはそれほど凡俗なものであったのだろうか。芭蕉程の人物として、気まぐれや、世にすねた閉関であってよいのだろうか。当時芭蕉は芸術的には行きづまり生活的にも疲れ切っていた。桃印や寿貞の病人をかかえて、どうにもならなかった時である。そんな時俳諧と無縁の人ならともかく、却って俳諧を思い出させるような人物と、会う気になれるだろうか。殊に呂丸は「盲亀の浮木に会えるが如き」人物である。相手が真摯に過ぎて、重荷になるだけである。

朝顔や昼は鎖おろす門の桓

芭蕉

門弟は勿論のこと、どんな親しい人とも会っていない。恐らく呂丸といえども例外ではなかった筈である。

たまたま芭蕉の閉関は、従来元禄五年と考えられていた。桃印や寿貞が枕を並べて病床にあったのはこの年の秋からで、年を越えて翌六年の春は最もひどかった。

「手前病人一両夜少心持かるき体に見え申候へ共大病の義故たのもし気薄く守り暮し候」

これは六年三月十二日付で、鶴岡の公羽に宛たものである。しかし五年は芭蕉庵を再建したばかりで、意欲的な年であった。許六が入門したのも、この年の八月で「画はとって予が師とし風雅はをしへて予が弟子となり」（紫門の辞）のように、他の弟子の入門の時には使ったことのない言葉さえ使っている。家族の重病とはいえ、秋にはがくと参って、閉関では軽薄過ぎる話である。

「三日月日記、芭蕉庵小文庫に出で、其の他の諸書にも掲げているが、殆ど異同がない。芭蕉が客を謝して門を閉じた時期は、従来元禄五年秋と推定されていたが、天野雨山氏が（山の音・昭和十四年）に（元禄癸酉の秋、人に倦みて閉関す）と題したこの句の真蹟を紹介され、又大磯義雄氏が芭蕉の白雪宛書簡を紹介したり（国語と国文学・昭和二十二年九月号）して、元禄六年がほぼ定説になっている。従って六年秋の作とみておく」（芭蕉集・杉浦正一郎氏）

この句とは「朝顔や」を指している。癸酉は元禄六年である。芭蕉には閉鎖癖はあったが（閑居の箴・貞享三年）六年春、桃印の死をきっかけに氣力を失い、同年秋閉関に至ったものである。呂丸が死んで半年後のことであった。

#### 四、南谷

呂丸との機縁は閉関の四年前、元禄二年の六月三日である。呂丸はこの日以来、六月十三日芭蕉が酒田へ行く日まで、師翁に隨身している。彼の邸跡は羽黒の小学校前であるが、そこから南谷へ行く芭蕉の途中吟が

涼風やほの三日月の羽黒山

芭蕉

である。これは推敲されて「涼しさやほの三日月の羽黒山」に改められた。祓川のあたりの強烈な印象が句になったのであろう。羽黒のどのあたりならその時刻に月が出るし、どのあたりでは月が見えないと吟味する人もあるが、作家にとっては場所よりも、モチーフと印象が重大である。

宿舎の南谷紫苑寺では

ありがたや雪をかほらす南谷

芭蕉

とよんだ。雪をかほらすも推敲である。（俳諧書留）（雪丸げ）は「かほらす」で（花摘）（南谷）は「雪をめぐらす」である。正しくは「かをる」であろう。

昭和三十九年三月、愛媛県の成田恒二郎氏が、愛媛大学の「国文学研究」に発表した論文を送ってくれた。南谷のこの句は

#### 一、南坊の茶の湯

#### 二、仏教の香南雪北

の意を含むのではないか、という問い合せである。茶の湯は知らないが、香南雪北は新解釈だと思った。もともと私は芭蕉が、ていねいなあるじもうけぐらいのことで、すぐ「ありがたや」などと口にする筈はないと思っていたからである。奢らず貧しからず、とりわけ句作で見識を忘れるほど世帯馴れした芭蕉ではない。南谷は芭蕉の林泉趣味にびったりであった。さて改めて、修験道のきびしさを目のあたりにすると、思わず出たのが「ありがたや」であったろうと思う。ところの名前は南谷で、香南雪北、即ち浄土に通うとすれば南谷に雪はないが「雪をかほらす」も無理な掛言葉ではない。芭蕉の禪と芭蕉の仏教的知識は、もっと信頼されてよい。「ありがたや」には仏縁の報謝が含まれている。

「三日ノ夜希有観修坊釣雪互ニ泣口ズ」（随行日記）

希有は「思ひがけなくも」の意味であろう。みちのくから出羽に廻り、計らずもそこで旧知に巡り会えたのも、単なる偶然とは考えられない。命あればこそその仏縁というものである。観修坊だけでなく、近江の円入とも会っている。四日は本坊若王寺で、別代会覚に正式に挨拶し、南部の藩侯代参法輪院や、その他の知人にも会っている。そばを馳走になったのはその日である。東北でそばは馳走分であるが、素直に素朴に仏恩奉謝として、ありがたやといったとしても、世辞的な低姿勢ではなかった筈である。この日若王寺で、表六句の運座が行われた。

五日は小雨である。明六日登山予定の天気を気にしながら、残り

の歌仙を巻いたものと思う。奥の細道本文に、八日、月山に登るとあるのは素庵の書き誤りか、芭蕉の記憶違いでフィクションとは関係がない。

歌仙を終つて師弟二人は、羽黒本社を参拝した。これも任意の参拝ではなく、修験道の掟による参拝である。お山精進のために、おはらいを受けねばならぬからである。おはらいの後で登山用の、木綿(ゆふ)しめや、宝冠を授与されることになっている。元来は霞場にせよ、檀那場ににせよ信者は自分で、用意して来るのがたてまえである。しかし芭蕉師弟のように、旅の途中にある者は本社で浄衣を授けて貰うことになっていた。

木綿しめは麻を用いて、編んで輪にしたものである。輪の作り方にも形式があるようだが詳かにしない。これを首から背中にかけて垂れさげるのである。僧の袈裟に当るものと考えてよい。但し袈裟みたいに幅つたいものではなく、麻で作ったネックレスと考えた方が早い。

宝冠とは長頭襟のことである。おもしろいのはこれを頭巾と書かないで、頭襟としていることである。頭に巻くターバンのようなものであるが、これもいわゆる頭巾ではなく、浄衣だからであろう。要するに頭に巻く白木綿で、両側に耳の結びをつけて肩にさげるのである。型も法式も専門的で、めんどろであるが、私には外見以外の知識がない。

これで、あとは体全体を包む白衣を着ればよい。杖と草鞋はいうまでもないが、以上で道者姿が出来上るのである。南谷を出た師弟二人は三の坂を登った筈である。後年今よんだばかりの発句が、そ

こに句碑になって建つとも知らなかった芭蕉である。  
この句碑は文化十五年に、鶴岡の俳人李夕が建てたもので、明治になってから現在地に移された。

「李夕舞台村大庄司知行百石トゾ羽黒御坂ニ蕉翁ノ碑ヲ立ツ三日日記ノ集ヲモ出ス此本書ハ祖翁ノ真筆ニテ呂丸ノ家ヨリ出ス竹江ヨリ李夕ニ伝リ今文明ノ家珍トナル」(庄内人物誌)

竹江は

浜枕に舟ゆすらせて涼みかな

竹行

とある「竹行」と同一人かは詳かにしないが、呂丸の弟子らしい。三日日記と呂丸の関係は、古くからの話である。

## 郷土文献

湯殿山紀行	無禪
庄内と象潟	勝峯普風
庄内に於ける芭蕉	玄々堂芦汀
庄内行脚の芭蕉	石井露月
庄内人物誌	写本
俳諧大泉	写本
鶴岡俳人	写本
酒田俳人	写本
加茂俳人	写本

立石寺の蟬	齋藤茂吉
露丸・郷土俳人	茂木 茂
芭蕉庵三日月日記	喜峯 社
鶴岡市史	鶴岡教委
酒田市史	酒田教委
羽黒の俳人図司呂丸	戸川安章
修験道と民俗	戸川安章
羽黒山に於ける芭蕉	戸川安章
三山の文学	工藤恒治
考証出羽路の芭蕉	佐藤 圓
小説出羽路の芭蕉	佐藤 圓
蟬と天の河	佐藤 圓
南坊茶事	成田恒二郎
聞書七日草	呂丸
陸奥衛	桃隣
葛の松原	不玉
随行日記	曾良
月山発句合	路通
笈日記	支考
三山雅集	呂笱
出羽風土記	
羽黒山中興覚書	

(本学講師・昭和8年東洋科卒)

(27頁よりつづく)

まあっており、これらの歌が量より質の面で李花集を通じ、新葉和歌集に反映し、人間宗良親王の精神が生かされているからである。

悲歌とは悲しい歌悲しみを詠ったものであるが、宗良親王の場合南北朝時代の国の乱れを憂え世を嘆き、彼自己の境涯を反省しているもので、そこに悲痛なものが慟哭され、歌が即興的に直感的に詠まれているので、その度がいっそう高まっているのである。

万葉集時代には雄大でおおどかな国を讃える歌であったのに比しこの吉野朝時代では沈痛な悲歌を新葉和歌集に象徴化したのは歴史的必然性でなければならなかったのか。

とにかくも、こうした背景を持つ新葉和歌集は、日本文学史上、その価値を悲歌に持たせている。そして、特異な文学のジャンルの地位を確保している新葉和歌集が世に出る前に、李花集が新葉和歌集成立実現に隠された力を持っていたことに疑いがないのである。

それは、李花集の文学史的位置として、新葉和歌集成立以前にあると考えられることになるし、さらに李花集成立が建徳二年であることにもつながっている。

長野県西筑摩郡三岳村立三岳中学校教諭

(昭和36年度国文科卒)